

Title	経済学会報告会論題
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.5 (1958. 5) ,p.433(61)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580501-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

で「ある。」(Menger: Untersuchungen, S. 145. 訳、一七六—一七頁。)ここでメンガーは「自然的有機体」について、ドルバツクは「人間」についてのべているのであるが、ただ両者が有機体を自然的過程のうちに見ていることに注意していただきたい。ドルバツクが人間についてこのように言う場合、もちろん他の有機体についてもこれを認めているのである。◎「経験は人間に劣らぬ感受能力」「靈魂＝精神」が動物にあることを証明している。」(Julien Offray de La Mettrie: Histoire naturelle de l'ame, 1745, Oeuvres Philosophiques de Mr. de La Mettrie. Nouvelle Edition, Corrigée & augmentée. Tome premier. A Berlin, 1774. p. 54. 青木・杉訳『ラ・メトリエ著 作集』上巻、八一頁。)

「他の有機体と人間との間には……心理的關係においても……[類似している]。したがって動物の場合にはみられない意識現象も一層高度の發展または複雑さとして理解さるべきである……。」(Menger: Grundsätze, 2. Auflage, S. 36.)

ここにフランス機械的唯物論的世界観とメンガーの世界観との親近性をみる事ができるのであるが、これは直接的なものではないであろう。むしろ前にもべたように十九世紀の自然科学の多くに見られる原子論的、機械論的性格を通しての親近性と言う方が正しいかもしれない。

(注2) だが我々がメンガーの世界をこのように理解するとき、一つの疑問がおこってくる。それは *Bedürfnis* がこのように自然

過程の結果としてあらわれてくるものであるとすれば、なぜそれが経済の根源的要素となりうるか、換言すれば経済の根源的要素も自然世界と同様に「原子」と「力」ではないのかということ、あるいは精密的経済学は物理学、化学からの長くとも可能であるとは思われないようなプロセスを経なければならぬではないかということである。

メンガーはおそらくこれを意識していなかったかもしれない。だが我々はこれを次のように理解することも可能である。即ちメンガーが *Bedürfnis* を外生的要因として考えていたとすることである。

メンガーは『方法』第一編、第四章で「人間経済の最も本源的な要因は、*Bedürfnis*, 人間に対し直接自然の提供する財貨(享樂手段ばかりでなく、生産手段をも含めての)、及び *Bedürfnis* の可能な限りの最も完全な満足(財貨欲求のできる限り完全な充足の)追求」である。これらすべての要因は窮極的には人間の恣意から独立しており、その時々事情によって与えられている」(S. 45. 訳、七五頁)とのべている。我々はメンガーのこれらの経済の本源的要因を二つに分けて考えることができる。即ち一つは内的な要因(これは *Bedürfnis* とその可能な限りの充足の追求である)と他は外的な要因である自然の提供する財貨である。前者については問題はない。後者がここでの問題である。即ち後者は『方法』において自然的世界が「原子」と力から成りたつと考

えられ、自然の精密的理解が「物理学」と「化学」からなされなければならぬ以上、当然根源的と考えられないはずのものであるが、彼はこれを人間経済の根源的要因としている点である。これは要するにメンガーが経済を扱う場合に自然の提供する財貨を外生的要因とみなし、根源的要因としたものであろう。したがって *Bedürfnis* が根源的であるとするのは *Bedürfnis* を外生的要因とみていたことを意味するとしてもよいのではないだろうか。

(注e) Untersuchungen, S. 66. 訳、九七頁。

(注4) もちろん「経済性」に結びつく現象を *wahr* とよぶ裏にメンガーが *wahr* なるものが望ましいものとして考えていたという事は言えるであろう。この点について杉村・山田両教授の所説はこれを更に考えなければならぬであろう。

経済学会報告会論題

〔昭和三十三年〕		
九月十二日	オランダの経済計画について	大熊 一郎
九月十九日	共同討論「日本経済の構造」	
	日本産業構造の問題点	鈴木 諒一
	日本経済の發展と外国貿易——交易条件と市場構造を中心として——	白石 孝
九月廿六日	所得税と消費税の効率効果	古田 精司
十月三日	漁業経済学の問題点	高山 隆三
十月十日	Responsibility Accounting の展開	高橋吉之助
十月十七日	近世初期の役家について	速水 融
十月廿四日	Marx and Keynes	R. Meek
十月卅一日	吾国の労働者の意識水準について	青沼 吉松
七月七日	成長経済学における利子率——イマンモデルについて——	村井 俊雄
七月廿一日	農業恐慌と土地所有の危機——「十九世紀末農業恐慌」の性格について——	常盤 政治
七月廿八日	原価計算制度の成立過程	坂本 藤良
七月五日	資金計画と利益計画	和田 木松太郎
七月十二日	国際財政学会婦朝報告	高木 寿一
七月十九日	経営政策と政府活動	関口 操
〔昭和三十三年〕		
一月十六日	現代経営学の基礎理論	野口 祐
一月廿三日	共同討論「生産性と賃金」	
	生産性の測定について	高橋吉之助
	生産性と賃金	辻村 江太郎
一月卅日	一八八〇年代に於る労働組合運動と社	飯田 鼎
	会主義——イギリス労働党の起源——	